

で示した音を兩字で示し、上の一字にもとの字と同音のものを用ゐ、下の一字にもとの字と同韻のものを用ゐ、兩者相切し一音を示すの法或は逆に二字で示した音を一字に約する法は、僅少なから所謂反謂反切の法の創始せられたといはるゝ時代より以前から存するやうで、前者の例としては春秋襄公十二年の條に、經には、「秋九月吳子乗卒」とあるのを、左傳には「吳子壽夢卒」として、而して杜解には「壽夢吳子之號」とあるが、顧炎武の補正には「一言爲乘、一言爲壽夢、非號也、解可削、或云于越、勾吳、邾婁、本一字而爲二字、古聲雙重也……又按李善文選注、引世本曰吳孰姑、孰姑壽夢也」と見える。莊子に楊朱を陽子居とも書き、前漢書匈奴傳に單于の姓を攣鞮とせるのを、後漢書同傳には虛連題とせる如きも同様の例である。筆を不律といふのも、從來の註釋の上に超越することを許されるならば、また此の例の一つと見得るであらう。實にこれについては戴震の聲韻考に附した沈樹眞の跋には、「不律爲筆反語之始……然其成書、則必推孫炎矣」といふて不律は\**pit*を寫したに外ならぬと見て居る。<sup>20</sup>後者の例としては既に先人屢々注意して居る通り之乎を諸とし、之焉を旃とし、何不を盍とせる如きはそれである。二字で表はす音を一字に約する法と共に、外國語とか漢語の方音とかを寫す場合に、一字で適當な音を得ない時に、約音と法を逆に用ゐた切音の法が存したと見ることは、必しも不當ではなからう。所謂反とか切とかの名で稱する表音法が孫炎以前に存しなかつたとは、舊說に拘泥しない限り、強く主張し得る所ではない。かく見得れば、祁連や赫連が *kien*, *khien* なる天の方音を匈奴に傳へて居つたのを寫したものであることは極めて容易に認められる。

以上兩様の説明を試みたについては、少くとも説明の仕方にて定見を缺くとの詬は甘受せねばならぬ。實際自